
トゥプーアに乗って～far away～

sorapon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トゥプーアに乗って〜far away

【Nコード】

N0821Z

【作者名】

sorapon

【あらすじ】

アーシアと呼ばれる世界、その中にリリアと呼ばれる小さな大陸があった。科学も魔法も進み、比較的平和なその大陸ではすべての国が纏まって、議会制と王権制を両立させながら発展していった。リリア歴1159年、汽車と呼ばれる魔法と科学が生み出した乗り物はそれに携わった者たちによって、古き言葉でトゥプーアと名付けられた。1160年、その年の始まる直前に無差別に送られた物、大陸全土に行くように作られたトゥプーアの一年間の無制限切符。少年ジルはそれを手にしたとき、旅に出ることを決めた。

アステイオバ

石畳の道。所謂中世ヨーロッパのような風景だが、道行く人々の中には獣のような姿もある。髪の色もまた、赤や緑、青といった現実味の無い色だ。

広い大通りを背の高い童顔気味の少年が、大きな鞆を背負い歩く。鞆というよりも袋といった方が正しいかもしれない。

彼は雑踏をかき分け進む。年の頃は現代で言う高校生だろう。しかしそれにしては少し遅しく見えなくもない肩が、道行く人に何度が当たる。

広く作られた道が更に開け、広場へとつながる。

広場には筒のような形の水晶が水を吹き出し噴水になっている。その周りには出店がある。その広場の正面とも言える場所にそびえるのは、白い壁の大きな建物だ。一番高い場所には大きな鐘がひとつ、よく見えるように付けられている。

その建物は古くからある、街の中心ともなった教会だ。

壁の中心より下の、すつと目に付く見えやすい位置には英字のような文字で名前が書かれている。教会の名であり、街の名でもあるそれは、『アステイオバ』。

その教会の前を少年は通り過ぎ、先程の雑踏よりは人の少なく開けた広場を一直線に歩く。

広場の西、少年が来た道から小さく左へ曲がった、教会の右前の場所に先程よりも大きな道がある。

そこには看板が立ち、矢印で何かを示している。

その道からは急ぎ足の中年の男や、花をカゴにいれた少しみすぼらしい少女、家族や友達の集団といった人々が行き交っている。

看板に書かれている文章は、訳すところなる。

「大陸横断鉄道 トウプーアはこの先です」

汽笛が鳴り、白い煙が小さく昇る。少年の隣を黒いローブの男が

通り過ぎた。

道の先の大きな横長の建物、駅から数人の男女が板を持って走ってくる。

「本日第5便がまもなく発車致します！」

「乗車予定の方はお急ぎください！」

「第5便まもなくです！」

広場の方々へ散らばりながら声を張り上げて走って行く。

少年は彼らを一瞥すると、少し歩調を早めて駅へ向かう。

駅はレンガで作られた、それほど背の高くない建物だ。

一つだけ高い見張り台のようなものがあるがそれ以外は同じ高さ。

少年は入口の右側にある窓口へ足を向ける。そこには一人の男が退屈そうに顔を出している。その奥には大量の紙を前に汗を流している同じくらいの年の男が二人。

窓口の男は少年が近づくと、愛想の良い笑顔で声をかけてくる。

「第5便ですか？」

「はい、切符はこれで」

少年は男の質問に答えて、白い襟のついたシャツの上に羽織った袖なしの上着のポケットから緑色の厚紙を取り出す。そこには『リア歴1160年 初の月から末の月まで』と。そしてその下には大陸横断鉄道の文字と羽と鐘を連想させる刻印が刻まれている。

「ああ、了解しました。失礼ですが確認を。」

「ジル・オウドラン、アステイオバの生まれで育ちも同じ。」

「年は。」

「リア歴1143年、散葉の月生まれ」

「確認終わりました、どうぞ通ってください」

そう言つと事務的な表情を崩し、今度は屈託の無い心からの笑顔で言つ。

「行ってらっしゃいませ、トウ・プシ・ウイニ・ア・ダンカ」

「行ってきます、ダンカ・ウナ」

旅立つあなたへ風と共に幸福を送ります。あなたにも幸せを。古

くからこの大陸に伝わる言葉で挨拶をして、少年は構内へ入る。

陽に焼けた石のホームには装飾の少ない汽車が止まっている。その傍らでは緑に白い線の入った大人達が客から荷物を受け取り積み込んだり、足の悪い人を手伝ったりしている。

それを尻目に少年は汽車に乗り込むと、人の少ない閑散とした車内の向かい合った程々に広い椅子に座り鞆を横に置いた。

今まで緊張していたのか、深く息を吐くと全身を椅子にあずける。全部で五両の汽車は何度も汽笛を鳴らす。

「まもなく発車します！」

入口を閉じるための柵が引かれていく。その向こうから一人の少女が走ってきている。

「ま、待って下さい！乗ります乗りますっ！」

汽車の扉を締めようとしていた人達の手が止まる。

「か、確認を。」

「これでっ！」

少女はジルと同じ厚紙の切符とメモを見せる。

窓口の男は気圧されたように仰け反りながら手で指し示し言った。

「ど、どうぞ。良い旅を」

「ありがとうございます！」

扉を締めようとしていた青い毛の獣人に会釈をして少女が乗り込むと、扉が閉じられた。

「慌ただしくなったなあ」

窓の外を眺めながら少年が呟く。

開かれた窓からは気持ちのいい風が吹いている。

「あの、そこ座ってもいいですか？」

「え、ああどうぞ」

先程の少女が向かいの席へ座る。手にもっていたオレンジの鞆を席に置くと、同じオレンジのワンピースと青地のライン入りの半袖上着を叩いて座った。

今度こそ入口の柵が閉められ、汽車の近くにいた人たちも離れて

いった。

「あの、どこまでいかれるんですか？」

「んー、大陸横断、だね」

「あは、私もなんです、おなじですね」

「そうだね。君、名前は？」

少女は茶色の髪に隠れた獣の耳を小さく揺らして答える。

「イルマ、イルマ・ハイレンダールです。あなたは」

「僕はジル・オウドラン、17歳のこれから旅人」

「じゃあ、もしよかつたら」

汽笛が大きく二度鳴り、車内が揺れる。

煙がたなびき、ゆっくりゆっくりと汽車は前へと進み始める。

慣れない感覚に驚いた二人は顔を驚きに変えて窓枠に掴まる。

汽笛にかき消された言葉を、少女はもう一度、大きな瞳を開いて

言った。

「もし、よければ、一緒に行きませんか？」

また、汽笛が鳴る。

流れに乗った汽車はどんどんとスピードを上げる。窓の外からは

まだ物珍しいのかわいらしい人たちがこちらを見ている。

少年は窓の外を見て、口を動かした。

街並みを抜けると広い草原と遠くには山の影。

少女は微笑む。

街では、正午を告げる鐘が大きく、鳴り響いている。

アステイオバ（後書き）

更新は遅くなると思いますが、ほのぼのできたらいいなと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0821z/>

トゥプーアに乗って～far away～

2011年12月3日00時47分発行